

〔論 文〕

## 日本における「スパルタ教育」理解

鈴木 円

### The Understanding of Spartan Education in Japan

Madoka SUZUKI

The term Spartan education, translated into Japanese as “Suparuta kyoiku” is widely used nowadays to mean “severe education.” This paper reviews 12 Japanese books or articles on Spartan education published from the 1870s to the 1970s and examines how the authors have understood Spartan education and in what context they have used the term. The above materials, published from the early Meiji to post-war period, suggest that Japanese learned about the education system of ancient Sparta from Western academic sources. However, after the influential bestseller, Shintaro Ishihara’s *Suparuta Kyoiku* (*Spartan Education; A book for raising tough kids*), was published, leading Japanese educators seem to have begun using the term “Suparuta kyoiku” to mean Japanese militaristic education. Historically, Western classical scholars have acknowledged the value of Spartan public education in contrast to Athenian individualistic education. However, Japanese educators seem to have failed to understand the value of Spartan education because of the change in the understanding of the term “Suparuta kyoiku.” The author concludes that educators ought to have used that term with that original sense in mind.

*Key words:* education system of ancient Sparta (古代スパルタの教育システム), Spartan education (スパルタ教育), Plutarch (プルタルコス), Xenophon (クセノフォン), militaristic education (軍国主義教育)

#### はじめに 一問題の所在と目的一

「スパルタ教育」という言葉は我が国において、一般に広く用いられてきた言葉である。この言葉は、古代ギリシアのスパルタで行われた軍事訓練一辺倒の教育というイメージから派生して、厳しい教育一般を指す場合によく使われている。スパルタの独特な教育の在り方は、そもそも古典古代にすでに、アテネの知識人たち、とくにプラトンやクセノフォンなどにより、アテネの教育の在り方へのアンチテー

ゼとしての意味を見いだされていた。そして、その後の西欧の教育にも様々な影響を与えてきた<sup>1</sup>。しかしながら、現代の我が国で「スパルタ教育」という言葉が使われる場合、古代ギリシアのスパルタにおける教育を指して使われることは教育学者の間に於いてさえまれである。「スパルタ教育」という言葉は、本来、古代スパルタの教育を意味する言葉であるにもかかわらず、なぜ教育学者までもが、厳しい教育一般を指す普通名詞として使用するようになったのだろうか。我が国において、古代スパルタの

1 宮澤康人「教育思想から学ぶ4 スパルタ教育の幻影」『季刊教育法』第18号、1975年、164-171頁。「古代スパルタへの憧憬は、ヨーロッパ史の中に脈々と生きつづけてきた。そのなかで、前4世紀のプラトン、1世紀のプルタルコス、18世紀のルソー、20世紀のナチズムの思想はそのピークをなしている。」(164頁)

教育がどのように受容され理解されたのか、さらに、「スパルタ教育」という言葉が普通名詞化されていたのはなぜかを明らかにすることが本論文の目的である。本論文では、明治時代以降の「スパルタ教育」を紹介することを目的とした文献及び教育学者が「スパルタ教育」について論じたいくつかの論文を検討することを通して、所期の目的に近づくことを試みたい。

西欧においては、古代スパルタの教育を論ずる際には、必ず言及されるべき第一次史料として、プルタルコス『リュクルゴス伝』とクセノフォンの『ラケダイモン人の国制』がある。古代スパルタの教育は、主として、記述が詳細なプルタルコスに依拠して語られることが多いが、クセノフォンも古典期に実際にスパルタの状況を知り得る立場にあり、自らの2人の息子もスパルタで教育した人物として、西欧では広く知られている<sup>2</sup>。第一次史料としてのプルタルコスとクセノフォンにどの程度目配りされているかも合わせて検討することを考察の糸口としたい。

## 1 「スパルタ教育」概念の受容

明治初期に古代ギリシアの歴史が我が国に紹介され、その中で、スパルタにおける教育も紹介されている。明治期以降、「スパルタ教育」がどのように受容され理解されていったかを、書物6冊と論文2篇を取り上げて明らかにしてみたい。

### (1) 楯岡良知等訳『希臘史略』<sup>3</sup>

この書物は、1872(明治5)年に文部省が刊行した書物である。凡例に「原書ハ西曆一千八百六十九年花旗アメリカ ニューヨークノ紐育ニ於テ梓行ス其国人息宅セウエール爾氏ノ著ハス所ニシテホルスト、ヒストリー、ヨフ、ギリシート

題セシ兒童ヲ開導スル希臘史ナリ著人ノ意モ亦便蒙ニ在ルノミ」(3丁表)とある通り、原書は、Elizabeth Missing Sewell, *A First History of Greece*<sup>4</sup>である。『希臘史略』は、明治期の最も早い時期の古代ギリシア史の紹介である。この書物の27丁表から29丁裏までスパルタの教育に関する記述があり、共同食事、子捨ての風習、7歳からの軍事訓練を主とし読み書きを軽視した教育の様子、衣服と寝具の質素さ、祭壇上における鞭打ちの風習、盗みの風習、金銭の軽視などが、原書の記述に忠実に訳されている。原書は子供向けに書かれたものであるためか、レファレンスが明示されておらず、第一次史料が何であるかの記述はないが、その内容からプルタルコスの『リュクルゴス伝』を主な典拠としていることは明らかである。

この書物は、スパルタ教育に関する価値判断はしておらず、西洋のすぐれた著作の翻訳を通してギリシア史を紹介することが本書の目的であると言える。西欧の文献に記された内容を忠実に翻訳することで、西欧文明を理解しようとする精神性をよく表している書物である。

### (2) 桑原啓一編訳『新編希臘歴史』<sup>5</sup>

この書物は1893(明治26)年に刊行された。凡例に「本書は主としてウィリヤム、スミツス(William Smith)氏の希臘歴史に拠り、傍ら諸書を参酌して之を記述したり」とある。学生用の教科書であるWilliam Smith, *A History of Greece: From the earliest times to the Roman conquest*<sup>6</sup>を中心に据えていると思われるが、目次の構成がSmithとは異なっているので、Smithの忠実な翻訳ではないようである。他のどのような資料を参照しているかは定かではないが、ギリシア史について極めて詳

2 近年のスパルタ研究におけるプルタルコスとクセノフォンの位置づけは、長谷川岳男「古典期スパルタにおける公と私—ポリス論再考—」『西洋古典学研究』第58号、2010年、12-24頁、に詳しい。

3 楯岡良知等訳『希臘史略』(東京:文部省、1872年)。森岡優紀「明治雑誌記事と魯迅の「スパルタの魂」」森時彦編『20世紀中国の社会システム』(京都:京都大学人文科学研究所、2009年)363-394頁、によって知る。

4 Elizabeth Missing Sewell, *A First History of Greece* (New York: D. Appleton and Company, 1857).

5 桑原啓一編訳『新編希臘歴史』(東京:経済雑誌社、1893年)。森岡優紀、前掲論文によって知る。

6 William Smith, *A History of Greece: From the earliest times to the Roman conquest* (New York: Harper & Brothers, 1875).

細に説明されている。

スパルタの教育に関しては、リュクルゴスの立法として、「少年の教育」「成年男子の教育」「公同会食」「女子の教育」について詳述されている。山中への子捨ての風習、共同食事、7歳からの政府役人による身体の苦痛を伴う体育を中心とした教育の様子、アルテミス祭壇における鞭打ちの風習、衣服と寝具、食糧の質素さ、盗みの風習と狐を盗んだ少年の逸話、文学の軽視と簡潔な言語で意を尽くそうとすることの説明、30歳から60歳までの共同生活、共同食事とその方法、体育を中心とした女子教育と他国の女子との比較及び女子の勇壮さについて記されている。内容的にはSmithの記述と順序においては一致しているが、所々取捨選択したあとが見られ、付加された部分もある<sup>7</sup>。Smithはレファレンスを明示していないが、プルタルコス『リュクルゴス伝』を主な典拠としているのは内容的に明らかである。

楯岡良知等訳『希臘史略』よりも内容的にかなり詳しいが、『希臘史略』同様、スパルタ教育に関する価値判断はしていない。西欧の文献の単なる翻訳を超えてギリシア史について詳細に紹介しようとする意図が見えるのが、この書物の特徴である。

### (3) 中西副松『スパルタの武士道』<sup>8</sup>

この書物は1902(明治35)年に出版されたもので、スパルタ教育に関してまとまった論評をしている点で注目に値する。著者の中西副松は、広島県出身の

陸軍軍人で、一時期参謀本部に出仕しており、その時期にこの著作を書いたようである<sup>9</sup>。この書物の特筆すべきところは、スパルタの教育を紹介だけでなく、著者の視点からスパルタ教育に対して独自の評価を下しているところにある<sup>10</sup>。

スパルタ人の人数が少なく、ヘロットやペリオイコイの十分の一に過ぎないことから、武力でもって彼らを屈服させる必要があり、そのために「一種の武士道を実践躬行する」(12頁)に至ったとして、スパルタの教育を「武士道」と捉えている。スパルタ教育の説明としては、子供の鑑定(子捨て)、体育、アルテミス祭壇における鞭打ち、夏冬共に同一の衣服、飢渴、寒暑に対する忍耐、盗みの許容、狐を盗んだ少年の逸話、文学・弁論・哲学の軽視、簡短な言葉(ラコニア体)の奨励、音楽(軍歌・讃美歌)の奨励について述べている。スパルタの歴史及び教育に関するこれらの記述は、桑原啓一編訳『新編希臘歴史』に依拠している。そして、このようにスパルタ教育の梗概を示した後、中西は、「如何に困苦欠乏に堪え克つの精神を励まして、軍人必須の性質を養成するに努めたることぞ」「如何に淫逸遊惰に陥るの道を塞きて、敬神愛国高尚なる思想を鼓吹せんと企てたることぞ」と評価している(15頁)。続けて、「吾人はスパルタの教育法が、克く当時の時宜に合し、其の時代の精神に適応したるものなるべきことを疑ふべき一理由を有せず」としながら、東洋では文武は鳥の両翼、車の両輪の如く文事を武人に欠くべからざるものとしていることを挙げ、ア

7 例えば、「故に後世簡短にして意を尽くす言語文章をラコニヤ体と呼べり」(24頁)という部分は、Smithにはない。

8 中西副松『スパルタの武士道』(東京:金港堂書籍,1902年)。

9 中西副松は同年、『軍事教育の本領』(東京:兵林館,1902年)を刊行しており、その著者肩書には、「参謀本部出仕陸軍歩兵大尉」とある。なお、寺内正毅(当時、参謀本部次長陸軍中将)がこの書物の序文を書いている。また、中西副松の略歴は、大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』(東京:東京美術,1971年)に「陸軍歩兵少佐正六位勲四等功四級 広島県深安郡福山町字鍛冶屋町三〇平民にして明治二八年中尉を以て歩兵第十一連隊旗手たり参謀本部出仕を歴三五年十一月十五日歩兵第十一連隊中隊長に補し二九日勲五等瑞宝章を賜ひ三八年三月八日田義屯附近に戦死す正六位(特)勲四等功四級に叙し旭日小綬章を賜ふ」と記載されている。

10 同時期に、スパルタ教育の評価をしている書物として、渋江保『希臘波斯戦史』(東京:博文館,1896年)がある。「斯巴爾達ノ教育ハ、勇者ヲ生ズレドモ其ノ他何者ヲモ生ズルコト能ハズ。世ニ文学芸ヲ言フモノ必ラズ希臘ヲ推セドモ、ソハ雅典等ノ謂ヒニシテ、斯巴爾達ハ、之ニ与カルコトヲ得ズ。斯巴爾達人ハ、雄弁ヲ蔑シ、哲学ヲ厭ヒ、簡単ナル金言ヲ以テ哲学ニ代用シタリ。又貿易ヲ禁ジ、鉄貨ノミヲ通貨ト為シテ、故サラニ不便ヲ旨トシ、美術ハ文弱ニ導クモノトシテ之ガ発達ヲ妨ゲ、農業ハ特ニヒロツトノミニ従事セシメタリ」(35頁)として、スパルタの文芸軽視の風潮や後進性を難じている。

テネにおいて「文運隆盛」していたにもかかわらず、スパルタが文事を「殆んど全く等閑に附せられたること」に注意すべきであると述べる。その理由として、「学問は智識を与ふ。学問の欠乏は即ち智識の欠乏なり。知らず智識の欠乏は、スパルタ人に如何なる弱点を生ずるに至りしか、是れ頗る価値ある研究問題なるべし」として、スパルタにおける知識教育の不足がスパルタの弱点を生んだことに着目している（16頁）。そして、紀元前432年のポティダイアの変を受けてのペロポネソス同盟会議におけるコリントス人の演説において、アテネが「果敢敏捷にして、天然の改革家」であるのに対し、スパルタが「因循姑息」で「既得の事物を保守することをのみ」思っていると指摘して、スパルタの態度を難じた部分を引いて、これが、スパルタ人が「学問を賤しみ、智識を軽んじ、心の明鏡を磨くことを怠りたる自然の結果」と指摘する（17-18頁）。さらに、ペルシア戦争における紀元前479年のマルドニオスのアテネ侵攻時にスパルタが当初援兵を出さなかったことに触れ、「斯の如き戦略を執るに至りたるは、恐らく彼等の敵を畏怖する怯懦より然るにあらずして、適当に状況を判断するの明なかりしに因る」とする（18-19頁）。

これらの史実から、「スパルタ人が如何に大局を達観するの明なく、連合与国の望に孤負する所ありしやを推知するに足るべし。是れ学問せざるの報なり。是れ智識を軽んずるの罪なり。是れ智力を重んぜざるの科なり」と非難している（19頁）。その上で、スペイン人の蛮勇と当時の国勢をこれになぞらえ、さらに大島貞恭將軍の「学問は、作戦をして、完全ならしむ」という言葉を引き、学問は、「克く人の行為をして、高尚ならしむ」とする（19-20頁）。さらに、我が国の武士気質を挙げ、徳川三代將軍の治世において、無教育であった武士が、「宋儒の理性の説」や「明朝忠君慷慨の談」をもって教育され、それが「天文以来の勇士猛将の言行」と合わさって一大道德教となり、忠義道のいかなるものかを彼らに教えたとしている。そして、その実例を赤穂浪士

の義挙を例に挙げて説明している。そして、「学問を賤みしは、スパルタ人の大なる過誤と謂はざるべからず」とここでもスパルタ人が学問を軽視したことを難じている（21頁）。一方、女子教育については、山鹿素行の女子教育に対する考えと一致する教育を行っていたと評価し（23-24頁）、さらに、スパルタ人の、胆気・礼讓・宏量・寛大・武勇の気風については、史実から実例を挙げつつ評価している。このように、スパルタ人の美質を認めつつも、リュクルゴスの制度を墨守するあまりスパルタ人が抱えるに至った欠点について、「智力を磨くこと」を怠ったからであり、「徒らに保守の主義に傾き」、「改良進歩を企図することなく、時代後れの国民となり、頑陋の敬神愛国家と」なったためであると批判している（48-49頁）。

この書物は、古代ギリシアの特に戦史の分析に基づいて、スパルタの教育を、東洋思想や我が国の歴史に照らして評価することを試みており、スパルタ教育を「武士道」と見た場合に評価すべき点と欠点を明確にして、我が国の進むべき道を若者に考えさせようとしている著作である。知り得た限りの史実に忠実である点、洋の東西をまたいで望ましい武士道の在り方を考えている点、一面的な賞賛や非難ではなく、スパルタ教育を多面的に評価している点、さらに東洋思想や我が国の歴史に対する見識が一貫した評価の基準となっている点において、すぐれた分析である。

#### （４）長谷川天溪『アリストートル 一名 希臘教育史』<sup>11</sup>

この書物は、1902（明治35）年に刊行された。ギリシアの教育史に焦点を当てて詳述したものとしては古い書物である。はしがきで長谷川が、「海外の良書を紹介するは、読む人のため亦吾れ自身のために却て利益多からむと思つて、トーマス、ダビッドソン氏が著なる『アリストートル』を抄訳することとはなしぬ」（1頁）と述べている通り、Thomas Davidson, *Aristotle and Ancient Educational*

11 長谷川天溪『アリストートル 一名 希臘教育史』（東京：同文館、1902年）。



*Ideals*<sup>12</sup>の抄訳である。長谷川は、原書に従って抄訳し、第2章第3節「ドリアンの教育」で、クレタとスパルタの教育について詳述している。

Davidson 自身が典拠とした史料は原書においても明示されていないけれども、プルタルコスを典拠としつつ多くの資料から材料を得ていると考えられる。また、Davidson は、クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』についてもよく研究していたと思われる。その点で興味深いのは、Davidson がスパルタ教育について説明した最後のところで、“And even Xenophon, at the end of a long panegyric on the Spartan constitution, is obliged to admit that already in his time it has fallen from its old worth into feebleness and corruption, and this in spite of the fact that he had his own sons educated at Sparta.”<sup>13</sup>（下線筆者）と述べ、明らかにクセノフォンの『ラケダイモン人の国制』第14章の記述に触れているのに対して、長谷川天溪の抄訳では、「クセノフホンと雖も、遂にはスパルタ往時の気象鎮沈せるを嘆ぜり」（36頁）とのみ記しており、クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』の記述であることに触れていないことである。

また、Davidson は Book II, Part II, “The New Education (B.C. 480-338)” の一章をクセノフォンに充てており、エピグラフとして『ラケダイモン人の国制』第1章第1節～第2節の文章を出典を明示せずに掲げている<sup>14</sup>。しかし、長谷川天溪は、エピグラフについてはすべて省略し訳出していない。さらに、Davidson は、クセノフォンの『キュロスの教育』の執筆意図に触れたところで、“Unwilling, probably, to hold up hated Sparta as a model to his beaten and smarting countrymen, he

laid the scene of his pedagogical romance in far-off Persia.”<sup>15</sup>としており、おそらくはアテネの人々の反スパルタ感情への配慮から、この作品の舞台をペルシアとしたことを説明しているが、長谷川はこの部分を、「然れども彼は元来スパルタを愛せざりしが故に、公にライカルガスを賞美するを嫌ひ、波斯の舞台を借りて、サイラスといふ理想的人物を掲げ出し、その行ひし所は斯の如しと記述して、国家の理想とすべき教育法を論述したりき」（71頁）と言葉を足して訳している。

クセノフォンが親スパルタ的な人物であることや彼の『ラケダイモン人の国制』という作品の存在を長谷川が知らなかったために、このような原典との齟齬が生じた可能性がある。

#### （5） 福島政雄『希臘教育史』<sup>16</sup>

1932（昭和7）年に刊行された福島政雄『希臘教育史』はその凡例によると、古代ギリシアの教育史を講義した草稿を整理したもので、著者自身がギリシア教育史入門のつもりで取り調べたとしている。広島文理科大学での講義草稿であろうか。そして、実際教育の変遷に関する部分については、Karl Schmidt の教育史第1巻<sup>17</sup>に負っているとし、根本史料に当たったのは、ソクラテスとプラトンに関する章だけであるとしながら、「全体を貫くものはあくまでも著者自身の精神であって、決して単に西洋の教育史家の叙述を紹介するに止るものではない」（1頁）と自負を示している。主要参考書目の中には、プルタルコスの『英雄伝』の英訳版<sup>18</sup>やクセノフォンの『オイコノミコス』<sup>19</sup>の希英対訳版も挙げている。

スパルタ教育については、この書物の第2章に

12 Thomas Davidson, *Aristotle and Ancient Educational Ideals* (New York: Charles Scribner's Sons, 1892).

13 Thomas Davidson, *op. cit.*, p. 51.

14 *Ibid.*, p. 114.

15 *Ibid.*, p. 115.

16 福島政雄『希臘教育史』（東京：目黒書店、1932年）復刻版（東京：有明書房、1987年）。

17 Karl Schmidt, *Geschichte der Pädagogik in der vorchristlichen Zeit: umfassend die Erziehung bei den Naturvölkern, im Oriente, bei den Griechen und Römern*. hrsg. von Emanuel Hannak, (Köthen: Erben, 1890).

18 “Plutarch's Lives. (Bohn's Popular Library)” と記載。

19 “Xenophon, Oeconomicus. (Loeb's Classical Library)” と記載。

「ドリア族及びスパルタの教育」と1章を充てて詳述しており、その内容は、Karl Schmidt及びプルタルコスの『リュクルゴス伝』を典拠にしている。プルタルコスの『リュクルゴス伝』については、「全く伝説的の伝記であって、多くの歴史家はその大部分を否定して居る」(24頁)と一定の留保を示しながら、その後のスパルタ教育の実際については、〈プルターコスの述ぶるところであって〉という表現が多く見られ、プルタルコスに依拠していることが分かる。

一方、クセノフォンについては、第2章では触れられていないが、第8章第5節「ソクラテスの教育の実際—その諸門弟について」で詳しく触れられ、クセノフォンとスパルタとの関係についても詳しく説明されているだけでなく、本書全体を通して、クセノフォンの著書に言及している<sup>20</sup>。しかしながら、アテネの最盛期の実際教育に触れた部分で、「而してそれは初めはクセノフォンの名を以て編纂せられたるものが示す如くに極めて实际的なるアテネやスパルタの国憲についての知識をあたへたものである。それが次第々々に発達して純粹に理論的な国家学とか政治学とかがあらはれて来たのである」(148-149頁)という記述があり、この部分は、Schmidtの原文では、“mußte er in erster Linie über die Gesetze und Einrichtungen des Staates belehrt werden, wie dies etwa durch die unter dem Namen Xenophons überlieferten Werke über die spartanische und athenische Staatsverfassung geschicht. Erst allmählich bildete sich aus diesen ursprünglich rein praktischen Unterweisungen eine Theorie der Staatswissenschaft oder Politik aus.”<sup>21</sup> (下線筆者)となっている。Schmidtは、明らかにクセノフォンの『ラケダイモン人の国制』及び『アテナイ人の国制』に触れているが、福島がこ

れらの著作の存在を認識していたようには見えない。スパルタ教育についての第一次史料のひとつである『ラケダイモン人の国制』については、未だ認識されていなかったように見える。

福島は、第2章「ドリア族及びスパルタの教育」の最後で、スパルタ教育に関して次のように評価している。スパルタ教育は個性の開発という面から見れば、個性を圧迫し無視する教育であり、自由は個人ではなく団体の自由として存在した。個人の自由は団体の自由のために犠牲となり、法によって定められた団体の意志に個人は全く服従した。国家の安寧が第一でありこの目的のために他のすべてのことは犠牲にされた。このようなスパルタ人の教育はスパルタ人の性格と一致したものであり、スパルタ人が原始の精神を失わない間はよく行われたが、この精神が失われ、奢侈に耽り、虚飾の風が行われるようになることとすたれていった。こうして、スパルタの特色ある教育は全く歴史的過去のものとなった(43-44頁)。この評価は、Schmidtによるスパルタ教育の記述を踏まえたものであるが<sup>22</sup>、それに加えて、福島は、プラトンがスパルタの教育を理想化し、『国家』において展開したことに触れ、「史上に於けるスパルタの教育は単に武人の教育たるに止ったのであるけれども、プラトンにおいては哲人の教育への過程となり、更に深められたる意義を有するに至ったのである」(44頁)と結んでいる。

西欧の文献を詳細に検討しつつ、限界はあるものの、スパルタ教育の西欧文明における位置づけについて正確に理解しようとする真摯な研究姿勢が見える書物である。

#### (6) 石山脩平『西洋教育史 第一 希臘篇』<sup>23</sup>

この書物は、1934(昭和9)年に刊行された。序言において、「従来本邦に於て刊行せられた西洋教

20 「オイコノミコス」(100頁)、「収入について」(149頁)、「ソクラテスの追憶」「アポロギア・ソクラテース」「シンポジオン」(189頁)ほか。

21 Karl Schmidt, *op. cit.*, s. 605.

22 *Ibid.*, s. 514-515.

23 以下の引用及び頁数は、石山脩平『古代ギリシア教育史』(『西洋教育史 第一 希臘篇』(東京: 目黒書店, 1934年)の復刻)(東京: 日本図書センター, 1978年)による。

育史は、今日の高師生徒の如く優秀なる素質を具へ且教育者としての専門的教養に精進する者にとって、概してその程度が低きに失し、分量的にも不足である。殊に古代及び中世に関しては——二三の特殊研究を除いて——通史としての叙述は甚だしく閑却せられてゐる。而も古代・中世を閑却して近世を理解せんとすることは、少くとも歴史的研究を重視する者の自家撞着と言はねばならぬ。斯かる事態に直面して私は取敢へず希臘・羅馬及び中世の教育史を従来よりも精細に叙述することの必要を痛感し、なほ余裕あらば近世教育史をもこの基礎工作の上に建直さんことを考へた。本書はこの計画の第一巻である」(1-2頁)と自負を示しているように、石山が東京高等師範学校教授として「西洋教育史」を講ずるに当たり、学生のために著されたものである。さらに、「努めて希臘原典に依拠すべきことを心に誓ひながら、少からぬ部分を近世語の訳書で間に合せたり、全体に亘って精読すべき古典の多くを単なる通読乃至抄読に止めたり、既成の哲学史や教育史の所説をそのまゝ借用したりして、危くも成った本書は、今直ちにその補正に着手すべき必要を、誰よりも先づ著者自身に痛感せしめる」(4頁)とあるように、石山は極力第一次史料であるギリシア語原典に当たろうとしていた。これは、石山が序言で謝意を示している菊池慧一郎や波多野精一から当時の第一級の古典教育を受けていたためであろう。

石山は、第2章第1節「スパルタの教育」においてスパルタの教育に言及するが、その内容は第1項「スパルタの建国とその国情」、第2項「リュクールゴスの業績」、第3項「スパルタの教育」となっている。第2項「リュクールゴスの業績」の中でリュクールゴスの伝説に触れ、伝説を伝える者として、プルタルコスだけでなく、ヘロドトス、アリストテレスとならんでクセノフォンを挙げており、クセノフォンに対する欄外注に“Xenophon, Lakedaimonion Politeia. X. 8.”<sup>24</sup>と記している(107頁)。これまで

検討してきた書物と異なり、クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』に確かに言及しているのである。しかしながら、第3項「スパルタの教育」においては、「プルタルコスの所伝を中心として、スパルタの教育制度の概要を示せば次の如くである」(113頁)として、プルタルコスのみを典拠に用いてスパルタの教育を概観し、その特色と史的意義について考察している。石山は、その項の最後に「スパルタ教育の全体的特色とその史的意義」として、スパルタ教育について次のように述べている。スパルタの教育は「硬教育」の代表であり、「あらゆる軟弱と放縦と個人的自我への阿諛とを警める力を蔵してゐる」(123頁)として、「スパルタ国民がドーリア種族中に於ても特にすぐれたる種族的特性と、その建国の事情・体制よりして樹立し維持した鞏固なる軍国主義的国民生活と教育とを、歴史に於ける比類なき個性として認識すると共に、その原型は、凡そ国民生活と国民教育とを国家の徹底的統制下に置き、国民の心身を不断に鍛錬し強化せんとする者にとって、永遠に一個の指導精神であることを認める」(123頁)と評価している。このスパルタ教育の評価は、軍国主義的傾向を強めつつあった我が国の当時の時代背景を反映しているとも見てよい。しかしながら、石山は、スパルタの教育よりもアテネの教育を高く評価しており、次節の「アテーナイの教育」においては、国家の成員としてのみならず人間そのものの完成を陶冶理想としたアテネの教育を評価し、国家理想において、アテネが遥かに高級であるとしている(148頁)。

なお、クセノフォンについては、第3章第5節「クセノブォーンとイソクラテース」において、「希臘教育史上看過し難きもの」(560-561頁)としてその略歴と著書、教育思想について紹介している。クセノフォンが、スパルタの教育を理想としたことには触れられているが、それは、『キュロス教育』に関する説明としてであり、『ラケダイモン人の国制』

24 クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』は全編リュクールゴスの定めたと言われる制度に言及しているのでこの欄外注でなぜ特定の章・節を挙げているのかが疑問だが、第10章8節には、リュクールゴスがヘラクレース一族の時代に生きていたことが記されている。この欄外注は、これを指して「伝説」と言っているのであろうか。

は著書として挙げられてもいないし、内容に触れられてもいない<sup>25</sup>。このことから考えると、石山は『ラケダイモン人の国制』について深く検討していたわけではないようである。

石山のスパルタ教育研究は、西欧の研究者の著書を翻訳するのではなく、ギリシア語原典から教育史を紡ぎ出そうとしたところに価値がある。スパルタ教育についても、プルタルコスを詳細に検討していることが見てとれる。さらに、石山のスパルタ教育研究が、純粋な古代ギリシア研究を超えて、スパルタ教育解釈に我が国の国情が影響していく様子をも垣間見ることができる。

#### (7) 池田計三「ギリシャ教育史の社会的解釈試論」<sup>26</sup>

1950（昭和25）年に書かれた論文である。池田は、古代ギリシアの習俗体制の崩壊過程に焦点を当て、習俗体制下の教育の代表としてスパルタの教育を捉えている（6頁）。さらに、アテネの教育についても、その基調は個人の自由にあるのではなく「古代ポリス的国家の維持」にあり、「習俗的な社会体制の永続」を最高目的として「軍国主義的なものを眼差していた」として、「スパルタもアテナイも共に古代ポリス的な固定的な習俗の中にあった」としている（7頁）。スパルタとアテネの教育体制が全く対立するものではないとする指摘、及び、習俗あるいはノモスから教育を見ようとする視点は重要である。なお、この論文もプルタルコスの『リュクルゴス伝』をもとに考察しており、クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』への言及はない。

池田は、教育史における「社会的乃至社会学的観点」（3頁）とその歴史的動向を踏まえ、かつ西欧の

古典学の研究動向を踏まえた見解を提出しており、極めて専門性の高い論文である。

#### (8) 石山脩平「スパルタ式教育の歴史的背景と現代的意義」<sup>27</sup>

1954（昭和29）年に書かれた論文である。当時の時代背景を踏まえながら、スパルタ教育について、詳細に検討している。この論文の特徴は、古代スパルタの教育を「スパルタ教育」として論じ、古代スパルタの教育の在り方に影響を受けた教育を「スパルタ式教育」として論じ分けている点である。

まず、「スパルタ教育」については、スパルタの歴史と国情を詳述しスパルタの教育の概要についてプルタルコスに基づいて述べている。また、テュルタイオスに触れ、彼がスパルタの教育に与えた影響について論じている<sup>28</sup>。スパルタ教育に関するテュルタイオスの果たした役割については、Jaegerも詳細に論じているので<sup>29</sup>、スパルタ教育についての当時の最新の知見とすることができる。なお、クセノフォンの『ラケダイモン人の国制』については、理想の国家体制としてリュクルゴスのスパルタをモデルとした例として、その名前が挙げられている（314頁）が、内容には触れられていない。

次に、「スパルタ式教育」については、「いまどきスパルタ式教育などを持ちだすのは、博物館から逆コースの標本を取り出して振りまわすようなもの」としながらも、そこに一面の合理性を認め、「行きすぎた自由放任主義教育への批判」から「スパルタ式教育への郷愁」が有力な教育思想家によって示されることが少なくないとし、スパルタ教育が「スパルタ式教育」とよばれる歴史的類型」をつくっており、それは、ギリシア民族の業績が「あらゆる文

25 クセノフォンの著作としてここで紹介されているのは、『アナバシス』『ヘレニカ』『キュロス教育』『アゲシラオス』『ソクラテスの思い出』『ソクラテスの弁明』『饗宴』『オイノミコス』である（562頁）。スパルタ王アゲシラオスに対する頌徳文である『アゲシラオス』に触れてはいるが、『ラケダイモン人の国制』には触れていない。

26 池田計三「ギリシャ教育史の社会的解釈試論」『教育学研究』第18巻第3号、1950年、2-19頁。

27 石山脩平「スパルタ式教育の歴史的背景と現代的意義」『児童心理』第8巻第4号、1954年、309-314頁。

28 石山脩平は、「西洋古代教育史に於ける言語の問題（一）」『教育学研究』第9巻第4号、1940年、350-363頁。においてすでにテュルタイオスに触れている。そして、注に“Pausanias, IV, 15, 3”と記しているが、Pausanias, IV, 15, 6の誤りと思われる。

29 Werner Jaeger, *Paideia: The Ideals of Greek Culture*. Volume I, second edition (translated by Gilbert Highet). Oxford, 1945, pp. 87-98. ドイツ語版1930年刊、英語版初版1939年刊。



化領域において「アルケー」(始源・原型・原理)的性格を有する」一例であるとする(309頁)。さらに、「スパルタ式教育の現代的意義」として、「ナチス・ドイツやファシズム・イタリアの教育が、多分にスパルタ式特質を復活させた」とし、「国民錬成時代の日本教育が——明治絶対主義国家の教育からの伝統をうけて——スパルタ式契機を含んでいた」とする(314頁)。さらに、「最近の教育界において、逆コースの非難を浴びながらも、若い世代に筋金を入れようとする憂国の至情(?)から、時に暴力を振ってまでスパルタ式教育を行う者があることも蔽いがたい事実である」ことを指摘し、暴力や体罰の非教育性を警告しつつも「国家としても個人としても、スパルタ式教育への郷愁を感じずような情況にしばしば陥るという事実」を思い起こし、「スパルタ的契機をも含めての教育の真実のありかたを沈黙思考することを怠ってはならない」としている(314頁)。

石山は、「スパルタ式教育」を論ずる際、古代のスパルタ教育から派生する「スパルタ的特質」や「スパルタ的契機」といった表現を使っているが、それらが何を指しているかを明確に定義しているわけではなく、「スパルタ式教育」という言葉を厳密に定義して使っているわけでもない。ただ、詳細なスパルタ教育の紹介から理解され得る「特質」や「契機」といったものに影響された「スパルタ式教育」が当時の「逆コース」の風潮の中で復活しつつある状況を憂慮する文脈である。

戦前戦後を通じて、石山は、西欧におけるスパルタ教育の研究動向をよく把握しており、スパルタ教育そのものの分析に加え、スパルタ教育が我が国の戦前戦後の教育にどのような影響を与えたのかという視点から考察を加えている。そして、安易なスパルタ礼賛に警告を発しつつも、スパルタの教育に、教育の本質的な意義を検討させる価値のあるものを認めている。「スパルタ式教育」という表現を用いて、古代スパルタの教育を連想させるがスパルタ教育とは直接関係のない教育の在り様を論じていることは特筆すべきことである。

以上、明治期から1950年代に至るまでの、8点の書籍及び論文を検討してきたが、西欧の学問的成果をわが国に取り入れ忠実に学ぼうとする段階から、我が国固有の、あるいは東洋思想との比較から、西欧文明を理解しようとする試み、さらに西欧の最新の知見を自分のものとして独自に解釈を展開する段階まで、スパルタ教育に関する知見は学術的な営みの中で深められていったと考えられる。

ただ、その営みの中で、西欧においては常識的に前提とされているものが看過され欠落することがあることも分かる。その例が、クセノフォン『ラケダイモン人の国制』に対する目配りである。古くから西欧においては知られていて、スパルタ教育考察の前提となっているこの著作が、我が国においてその価値を知られるには相当の時間を要したことも分かるのである。さらに、古代スパルタの教育とは無関係な我が国の教育の状況、すなわち、我が国の戦前における国家主義的教育の在り方や戦後民主主義教育に対する「逆コース」の復古的教育の在り方が、スパルタの教育になぞらえて語られる現象に、教育学者が学術的論文の中で着目し始めていることが分かる。そして、このことは、「スパルタ教育」という言葉の意味の変質をも反映していると見ることができる。

## 2 スパルタ教育理解の変質

スパルタ教育について、明治期の西欧の文献をそのまま紹介する段階から、戦後、西欧の学術的成果を踏まえて専門的見地から解釈がほどこされる段階に至る一方、我が国のある種の教育の在り方が古代スパルタの教育になぞらえて語られるようになる過程を見てきたが、このような学術的な検討とは別に、戦後、「スパルタ教育」という言葉が人口に膾炙したのは、1969(昭和44)年に出版された石原慎太郎の『スパルタ教育: 強い子どもに育てる本』<sup>30</sup>がベストセラーになったことが大きく影響している。石原のこの著作は、「スパルタ教育」という題名を冠していながら、石原自身の教育観を披瀝したに過ぎ

---

30 石原慎太郎『スパルタ教育: 強い子どもに育てる本』(カッパ・ホームス)(東京: 光文社, 1969年)。

ず、古代スパルタの教育については全く触れていない。「スパルタ教育」という言葉が独り歩きし、古代スパルタの教育ではなく、厳しい教育のイメージを表す言葉として我が国で広く用いられるようになった背景には、この著作の力が大きかったと考えられる。

この著作が出されてから、1970年代前半にかけて、『児童心理』誌上において、教育学者による「スパルタ教育」に関する論考が多く見られるようになる。全く学術的ならざる一般の書籍に対して、多数の教育学者が論じているところからも、石原の著作の影響力の大きさがうかがえよう。しかし、教育学者は、石原の「スパルタ教育」を論ずるうち、石原同様、学術的な分析を離れ、石原の教育観に対して「スパルタ教育」という名を与えていく。学術的分析よりも、石原による「スパルタ教育」によって喚起される教育イメージに対して、教育学者たちがそれぞれの立場から戦いを挑み、それゆえにかえて「スパルタ教育」という言葉の意味が変質していった過程を、『児童心理』に掲載された3篇の論文から探っていきたい。

#### (1) 中内敏夫「スパルタ教育で強い意志は育てられるか」<sup>31</sup>

中内は、「スパルタ教育」は、「世間で「意志」の教育といえはすぐこれを思い出し、きびしい教育のお手本のように考えられている教育」であり、「子どもや子ども集団の自主的な判断と選択ぬきの教育」であることにその特色があるとし、「あくまで恥の意識に訴える教育であって、罪の意識に足がかりを求める教育ではない」とする(141頁)。そして、「実質においては旧軍隊式の訓練と同じ」とし、「単なるリバイバル・ブームに乗ってのことということ以上の、もっと深く大きい日本の教育構造の変化の事実を考えてみなければならない」として、「スパルタ式と呼ばれる反主知主義教育の対概念を形成する日本の知育のあり方」を問題にしなければならな

いとする(143頁)。中内は、「スパルタ教育」の特質を、「きびしい教育」「恥の教育」「子供の自主的判断と選択抜きの教育」「反主知主義的教育」であるとして旧軍隊式の教育と重ね合わせて理解し、それが当時の世間の風潮の中で復活の兆しを見せていることを強く憂慮している。中内の「スパルタ教育」は、古代のスパルタの教育を論じているのではなく、「スパルタ教育」という言葉から想起される戦前の特に旧軍隊式の教育の復活の兆しに対して、戦後民主主義教育の立場から警告を発している。この論文では、古代スパルタの教育そのものについては、全く論じられていない。

#### (2) 新堀通也「スパルタ教育と子どもの反抗」<sup>32</sup>

新堀は、子どもの反抗行為について、その特徴として「反逆信仰」「実践信仰」「暴力信仰」「階級制」「集団信仰」の五つを挙げ、それぞれについて、当時の青少年のおかれた状況から論じていく。その上で、それらを「普通スパルタ教育といわれるものの特徴でもある」として、「からだごとぶつかっていきける男性的、父親的な相手、全身全霊を打ち込みうる実践の目標、身体的な鍛錬、強力な指導者、忠誠を誓いうる仲間、理屈ではなく実践、自己犠牲など——そうした要求が満たされないから、子どもはおとなに反抗するという一面をもっている」とする(62頁)。さらに、「スパルタ教育」は子どもさえ潜在的に求め、大人の中にもその復活を求める声が「ようやく高い」とする。その上で、これらの反抗の特徴を反民主主義の特徴と規定し、「外からの他律的なスパルタ教育ではなく、内からの自律的なスパルタ教育」が「子どもの反抗の源たる不満をどう解消するか」と問いかける(62頁)。新堀は、子どもの反抗という問題に対して、反抗する子どもの中に潜在的に「スパルタ教育」を求める心理を認め、それを、他律的な厳しさではなく、自律的な厳しさによって克服することをすすめている。「スパルタ教育」という言葉を、反抗する子どもの深層心理を

31 中内敏夫「スパルタ教育で強い意志は育てられるか」『児童心理』第23巻第3号、1969年、141-145頁。

32 新堀通也「スパルタ教育と子どもの反抗」『児童心理』第26巻第7号、1972年、57-62頁。

読み解くキーワードとして使用し、子どもと大人に共通する反民主主義的傾向として「スパルタ教育」志向を捉えている。新堀の用いる「スパルタ教育」は世間的な意味での「スパルタ教育」を教育学的に分析の俎上に載せたもので、古代スパルタの教育とは直接的に関係はしていない。

### （３） 斎藤正二「スパルタ教育」の原像をさぐる<sup>33</sup>

斎藤は、我が国における古代スパルタの教育の理解の不十分さを真っ向から説いて、「スパルタ教育」礼賛の風潮に対して批判の矛先を向けている。斎藤は、石原の『スパルタ教育』がベストセラーになって以来の「スパルタ教育」が讃えられる風潮に警戒感を示す。そして、スパルタ教育という概念が、「古代スパルタで行なわれた厳格な国家主義的教育、転じて厳格な教育の意」と普通には理解されていることを指摘し、単に「厳格な教育」と言うべきところに、「スパルタ教育」の語を使うことによって、それが、「価値あるもの、機能あるもの」であるとする暗契が働くことを危惧している（180-181頁）。さらに、「スパルタ教育」やスパルタの社会構造が賞賛の対象になることを「権力側が仕組んだこと」とする一方、民衆にも「スパルタ教育礼賛の風潮をやすやすと受け入れる心理的状況」があることを指摘し、「世界じゅうを捜し回っても、今日、こんなにスパルタ教育を謳歌している国は、われわれの日本しか見いだされはしない」と指摘している（181頁）。斎藤は、日本の民衆がスパルタ教育を良い方法であると考え理由を三つ挙げ、日本が近世封建時代から引き続き「専制位階関係」を温存していること、支配に基づく社会が根本的に肉体的暴力に依存していることを見聞した民衆が人生の勝利者となるためにはアンフェアー（不正）な人間になるよう強制されていると思込んでいることと並んで、「かれらが、世界史とくに古代東地中海の歴史に暗く、そのためにスパルタのポリス的特質について驚くほど無知であるという点」に求め、「スパルタ社会の本質を構造的に正しく認識し得ている人には容

易に出会ったことがない」としている（181-182頁）。そして、スパルタ教育として理解される内容が、プルタルコスの『リュクルゴス伝』を典拠としていることを指摘し、クセノフォンやプラトンについては、「スパルタ教育を無批判にべた褒めしている」（傍点原文）ので史料価値は乏しいとして退けている（182頁）。斎藤は、スパルタ教育の内容について、プルタルコスの『リュクルゴス伝』の引用を13項目にわたって列挙しながら論じる（183-186頁）。その上で、古代スパルタの教育を「非人間的」「非文明的」「反理性的」と断じ、「言語道断な少数支配の政治体制が、言語道断な教育事実を生みだした」とし（186頁）、それが戦前の日本の帝国主義やナチスの行為と同じ軌跡を描くとした上で、我が国の良心的知識人が、日本の軍国主義教育やナチス教育には鋭敏に拒絶反応を示すが、「スパルタ教育」という用語に対しては鈍感であることを指摘する（186頁）。そして、「スパルタ教育」の語が、今日平然とまかり通っているのは、日本社会にファシズム台頭の兆が強まっている証拠」とした上で、石原の『スパルタ教育』を引用し、そこに暴力礼賛、戦争賛美の思想を読み取っていく（187頁）。最後に「スパルタには文化もなかったし、人類史の進歩発展に何一つ貢献するところもなかった。スパルタ教育に何一つ美点もないのに、これを礼賛する現代日本の風潮はあまりにも反理性的に過ぎる」と結んでいる（187頁）。

斎藤が、単に「厳格な教育」というべきところに「スパルタ教育」の語を用いることによって、その語が指し示す意味内容に付加価値を加えることを批判している点は卓見である。しかしながら、プルタルコスに基づいて古代スパルタの教育を概観しながら、古代スパルタの教育に全く文明史的価値を認めないところは早計であろう。石原の教育思想の中にファシズム的なものを感じ取り、それを否定しようとするがあまり、古代スパルタの教育を、石原の『スパルタ教育』における教育思想と重ね合わせてしまったものと考えられる。その意味では、斎藤もまた、「スパルタ教育」を考える際、古代スパル

33 斎藤正二「スパルタ教育」の原像をさぐる『児童心理』第27巻第11号、1973年、180-187頁。



タの教育そのものの価値に目を向けることができなかったとすることができる。

いくつかの論考を検討してみたが、「スパルタ教育」という言葉が、古代スパルタにおける教育そのものを表す言葉ではなくなり「スパルタ教育」というある種の我が国の教育の在り方を指す言葉に変質し、古代スパルタの教育から乖離した議論が続けられたことが分かる。教育学者は、古代スパルタの教育への言及を避けて石原の「スパルタ教育」を論じるか、または、プルタルコスを典拠としたスパルタ理解に、自己の教育観を投影して論じるかのどちらかであって、石山以前の教育学者たちに見られたような、原典に基づいて古代スパルタの教育を虚心に検討しようとする態度は見られない。石原による「スパルタ教育」イメージに対して戦いを挑むうち、かえって石原の「スパルタ教育」イメージに取り込まれ、我が国における「スパルタ教育」という言葉の意味の変質を追認してしまったのではないだろうか。

## まとめと今後の課題

我が国においては、明治初期から教育史的観点に基づく西欧の学術的な研究が翻訳紹介され、「スパルタ教育」という語が古代ギリシアの教育を指す固有名詞として使われるようになった。そして、戦中戦後に至るまで、古代スパルタの教育に関する学術的な研究が進もうとしていた一方、「スパルタ教育」という語に象徴的に表されるような厳格な教育を指す言葉として「スパルタ教育」という語が普通名詞化し、我が国におけるある種の教育的な思想ないし立場を表す言葉となっていった。「スパルタ教育」という語の普通名詞としての使用を決定的にしたのは、石原慎太郎『スパルタ教育』（1969年）である。石原慎太郎の『スパルタ教育』以降、多くの教育学者は、「スパルタ教育」という言葉に象徴されるものが、戦前戦中に行われた旧軍隊式教育であり、「スパルタ教育」の復活がとりもなおさず、戦後民主主義教育を破壊するものとして危惧を表明してきた。そのことがかえって、「スパルタ教育」という

語が古代スパルタの教育を離れて使用される傾向を強めるとともに、論者によって異なるニュアンスで使用される結果を招いた。この我が国独自の状況により、西欧教育思想において、古代ギリシアのアテネの個人中心の教育と対置される公教育の在り方として、スパルタの教育が捉えられ、価値づけられてきたことが正当に理解されにくい状況を生んでしまったのではないか。

むしろ、石原の『スパルタ教育』に対して、学術的な観点から「それはスパルタ教育ではない」という立場で教育学が理論構築していれば、古代スパルタ教育の価値を正当に評価することができたのではないだろうか。

西欧においては、古代スパルタの教育像が再構築されつつある。その動きを踏まえた上で、古代スパルタの教育の価値をどう捉えるべきかを、とくにクセノフォン『ラケダイモン人の国制』をはじめとする原典史料に基づいて考察することが今後の課題である。

## 引用・参考文献

- 池田計三「ギリシャ教育史の社会的解釈試論」『教育学研究』第18巻第3号、1950年、2-19頁。
- 石原慎太郎『スパルタ教育：強い子どもに育てる本』（カッパ・ホームス）（東京：光文社、1969年）。
- 石山脩平「西洋古代教育史に於ける言語の問題（一）」『教育学研究』第9巻第4号、1940年、350-363頁。
- 石山脩平「スパルタ式教育の歴史的背景と現代的意義」『児童心理』第8巻第4号、1954年、309-314頁。
- 石山脩平『古代ギリシア教育史』（『西洋教育史 第一 希臘篇』（東京：目黒書店、1934年）の復刻）（東京：日本図書センター、1978年）。
- ウシンスキー『教育の人間学』柴田義松訳（東京：学文社、2010年）。
- 大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』（東京：東京美術、1971年）。
- 久保正彰「ソクラテースからアゲーシラーオスまで一伝記作者クセノフォンについて」『古典古代における伝承と伝記』（東京：岩波書店、1975年）、131-159頁。
- 桑原啓一編訳『新編希臘歴史』（東京：経済雑誌社、1893年）。
- 斎藤正二「「スパルタ教育」の原像をさぐる」『児童心理』第27巻第11号、1973年、180-187頁。



- 渋江保『希臘波斯戦史』（東京：博文館，1896年）。  
 新堀通也「スパルタ教育と子どもの反抗」『児童心理』第26巻第7号，1972年，57-62頁。  
 楯岡良知等訳『希臘史略』（東京：文部省，1872年）。  
 中内敏夫「スパルタ教育で強い意志は育てられるか」『児童心理』第23巻第3号，1969年，141-145頁。  
 中西副松『軍事教育の本領』（東京：兵林館，1902年）。  
 中西副松『スパルタの武士道』（東京：金港堂書籍，1902年）。  
 長谷川岳男「古典期スパルタにおける公と私ーポリス論再考ー」『西洋古典学研究』第58号，2010年，12-24頁。  
 長谷川天溪『アリストートル 一名 希臘教育史』（東京：同文館，1902年）。  
 福島政雄『希臘教育史』（東京：目黒書店，1932年）復刻版（東京：有明書房，1987年）。  
 藤井一光「社会的合意における「教育の目的」についての一考察ースパルタとアテナイを中心に」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書』，2009年，11-21頁。  
 松本仁助訳『クセノポン 小品集』西洋古典学叢書（京都：京都大学学術出版会，2000年）。  
 宮澤康人「教育思想から学ぶ4 スパルタ教育の幻影」『季刊教育法』第18号，1975年，164-171頁。  
 宮寺晃夫「教育の合理主義的理解とは何か」『教育哲学研究』第63号，1991年，4-10頁。  
 村川堅太郎編『プルタルコス英雄伝 上』ちくま学芸文庫（東京：筑摩書房，1996年）。  
 森岡優紀「明治雑誌記事と鲁迅の「スパルタの魂」」森時彦編『20世紀中国の社会システム』（京都：京都大学人文科学研究所，2009年）363-394頁。  
 山本周次「ルソーとスパルタ」『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』第8号，1996年，103-124頁。  
 ルソー『政治経済論』河野健二訳，岩波文庫（東京：岩波書店，1951年）。  
 和歌森太郎他「石原慎太郎著『スパルタ教育』を読んで」『児童心理』第24巻第5号，1970年，129-137頁。  
 Cartledge, Paul, *Spartan Reflections*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2003.  
 Davidson, Thomas, *Aristotle and Ancient Educational Ideals*. New York: Charles Scribner's Sons, 1892.  
 Ducat, Jean, *Spartan Education*. Swansea: The Classical Press of Wales, 2006.  
 Gerber, Douglas E. (ed. & tr.), *Greek Elegiac Poetry: From the seventh to the fifth centuries BC*. (Loeb Classical Library), Cambridge: Harvard University Press, 1999.  
 Gray, Vivienne J. (ed.), *Xenophon On Government*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.  
 Jaeger, W., *Paideia: The Ideals of Greek Culture*. Volume I, second edition, translated by Gilbert Highet. Oxford, 1945.  
 Kennel, Nigel M., *The Gymnasium of Virtue: Education & culture in ancient Sparta*. Chapel Hill & London: University of North Carolina Press, 1995.  
 Lipka, Michael, *Xenophon's Spartan Constitution: Introduction, text, commentary*. Berlin; New York: de Gruyter, 2002.  
 Perrin, Bernadotte (tr), *Plutarch's Lives, Volume I: Theseus and Romulus. Lysurgus and Numa. Solon and Publicola*. (Loeb Classical Library), Cambridge: Harvard University Press, 1914.  
 Rawson, Elizabeth, *The Spartan Tradition in European Thought*. Oxford: Oxford University Press, 1969.  
 Schmidt, Karl, *Geschichte der Pädagogik in der vorchristlichen Zeit: umfassend die Erziehung bei den Naturvölkern, im Oriente, bei den Griechen und Römern*. hrsg. von Emanuel Hannak, Köthen: Erben, 1890.  
 Sewall, Elizabeth M., *A First History of Greece*. New York: D. Appleton and Company, 1857.  
 Smith, William, *A History of Greece: From the earliest times to the Roman conquest*. New York: Harper & Brothers, 1875.  
 Strauss, Leo, "The Spirit of Sparta or the Taste of Xenophon" *Social Research*, Vol. 6, No. 4, 1939, pp. 502-536.  
 Tuplin, Christopher (ed.), *Xenophon and his World: Papers from a conference held in Liverpool in July 1999*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2004.  
 （文献引用に際して，漢字については旧字体は新字体に直し，かなづかいについては濁点表記のないものに濁点をほどこし，拗音・促音が大きく表記されているものは小さく直した。）

（すずき まどか 初等教育学科）